

## 学生相談事例報告 先端恐怖症の学生への心理面接

蘭 香代子

Supporting A Student  
Who is Afraid of Sharp Objects

Kayoko ARARAGI

本事例は、先端恐怖症を訴え、治したいという強い希望の元に心理面接を行なった事例である。先端恐怖症は、神経症の中の一部に属し、その明確な治療法は確立していない状況にある。本事例は、治療への積極性を持ち9ヶ月の面接過程で箱庭、コラージュ、心理面接を行ない、先端恐怖症を克服した。面接完了となった事例なのでその対応や援助を含めここに報告する次第である。

### 主訴

自分は先端(?)恐怖症みたいに尖った物とか目に物を近づけられるとすごい怖いんですけど、将来のこととか考えると治したい。だけど訓練とかすれば治るのか、一生治らないのかすごい不安なんです。

### 生活歴

中学・高校の家庭科の授業で、隣の席で針を持っている人が怖くて気になる。涙が止まらなくなった。気づいた小児の頃、恐怖感を越えて、先端に対して「殺される」と思った。今は慣れたのかそこまでの感情はない。中学の頃から先端を向けられると気持ち悪くなる。目をつぶると残像が残り苦しい。

面接期間；2001年5月23日から2002年1月18日  
(計14回) 金曜日16時半から18時

面接計画；事例は活動的で、内省よりは行動タイプであった。気づきが少ない感じで行為で処していくタイプのように見受けられ、感情の投影、整理として箱庭表現を進める。さらに面接のなかで先端恐怖の原因を探り、自信を育て、アイデンティティ獲得に向けた援助をしていく。

### 面接過程

面接は14回で、主な経過から3期に分けられる。①防衛期、②葛藤期、③自己統制期と名づけられる。面接過程及び変化の主な内容は以下のとおりである。主な経過を事例の発言〈 〉と、( ) による面接者の援助発言として示す。

#### 第1期；防衛期(1回目から3回目)

1回目；たくましそうな格好(ジーンズ姿)で髪を多く膨らませ面接に来談。保育士になりたいから、先端恐怖症を治したいのをお願いしますとの、強い希望あり。〈中学2・3年の頃、姉がコンタクトを始めた。姉が目には自分の指を刺しているのを見て自分も真似てみたら恐怖感

が出た。それまで先端恐怖という症状は気づかなかった。気づいた頃は、恐怖感を越えて、先端に対して「殺される」と思った。中学・高校時代は、家庭科の授業で隣の席の人が針を持っていると怖くて気が気でない。短大の友達がふと、シャーペンを向けるので「先端が怖いから向けないでね」「あーゴメンネ、ダメなんだよね」とそんなことの繰り返しだった。その時頼んでもまたやられるんだろうな。少数の友達には話している。> (大変だったね。辛かったね。何が原因したんだろうね。ゆっくり考えてみようね) <はい。身体的には、中学の頃から先端を向けられると眉間が気持ち悪くなる。目をつぶると残像が残り苦しい。> (うん。わかる。うん) <高校3年から今もアルバイトをしている。バイトはスーパーのレジ。仕事上特に問題はない。> (すごく遅いんだね。そんなにバイトしてるんだ。バイトのときは気にならないの) <気にしていても無視する。仕事にならないと困るから> (ううん。そうか。なるほどね)

2回目； <朝寝坊した。7時に起きようとして二度寝をして8時に起きてまたピアノの練習をして、2時間目はピアノに出て、7月19日にコンサートの練習をして、食事して、授業を受けて、ここに来た。お母さんはおうちで洋服を縫っている。昔はケンカはしたけど、母はやさしいときはやさしい。私は高い所が苦手。昔に手術、足を焼いたり、手に麻酔注射（脂肪のかたまり）をして痛がった。> (うわあ。手術したり注射したり、痛い目にあってきたんだね。よく頑張ってきたね。注射の針への後遺症みたいなものかな。先端が怖いのは) <わかんない。>

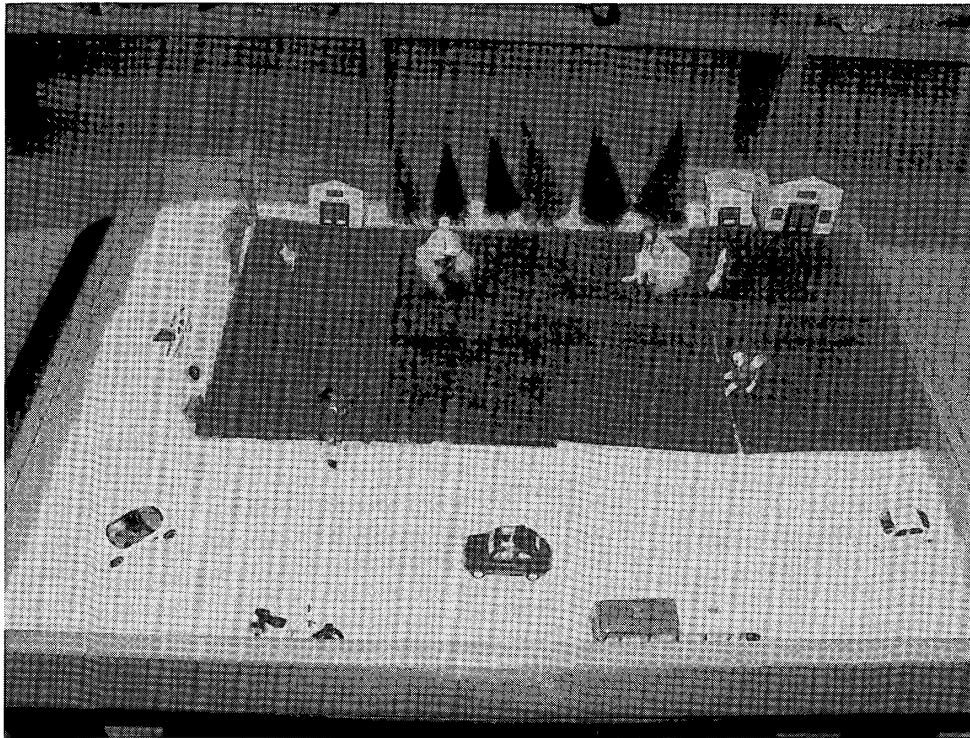
イメージ療法をする。(自分が小さく丸くなって、軽くなって転がっていきます。止まったところで目を開けてください) の教示のもとに行う。

ボールがいっぱいあった。どれを追っていつ

たかわからなくなる。⇔バスケットボールくらいかな。いやバレーボールになる。そこまで1個。⇔ピンポン玉から小さなボールになって、ボーリング場みたいところで最後落ちる手前で止まった。(止まってよかったね) <うん、落ちなかった。>

3回目； <先生、注射の後遺症かなって言われたけど、考えたけどわからない> (わからないのはそのままでいいよ。注射をよくした頃のことを少し詳しく話してもらえるといいんだけど) <小さい時はよく高熱を出して薬でよくならず、よく注射をしたんだって。元気は少しあったらしいんだけど、熱がすごく高くなって。体が弱かった。注射は痛くて医者に行きたくないって泣いて叫んで、でも母は連れて行って注射して、でもそのあとよく頑張ったねと母がほめてくれて、大好きなソフトクリームを買ってくれた。母はいつも仕事のことで忙しく、私のことはみれなかったけど、病院に行くときは母とふたりになれ、注射したあとはとてもやさしかった> (そうか。注射は痛くて嫌だったけれど、お母さんとふたりだけのとても楽しい時間が持てたんだね。痛さと優しさがいっしょになってたんだ。でももう大きく丈夫になったから注射なくていいから。心配しなくていいよ) (うん。よかった) イメージすると <イメージで小さくなってボールになって転がっていく。前と同じように転がって消えちゃった。暗い方に行っちゃった。暗いから見えなくなっちゃった。あら、いなくなっちゃったという感じがする。>

<お金がないから授業料は親が出してくれるが、あとはバイトで月6〜7万稼いでいる。週4日、自分の小遣いと貯金。それから交通費と実習費と教科書代にしている。> (感心だね。もうすっかり大人になろうとしているんだ。ところで体はだいじょうぶなの。講義に差し支えないの) <いや、今のところは両立している。辛



箱庭写真 Ⅰ

いとき多いけど。自立したいから。卒業して、就職してお金がある程度になったら一人暮らしをしてみたいから>(そうだね。できそうだね。あなたなら。でもいまはバイトは大学の補助だからね。主にならないようにね)<わかってます。>屈託なく笑う。

#### 第2期；葛藤期（4回目から9回目）

4回目；<一週間、土曜日に友達の家泊まりに行って、キムチ鍋してよく寝た。3時頃～4時半に起きて着替えてボーとして、友達が5時頃来てから10時頃まで寝た。休日らしい日を過ごした。色んなことを話した。友達の箸がこっちを向いた。ちょっと恐い感じがした。目をつぶった。でも涙は出なかった>(よかったね。友達は信頼しているからかな)

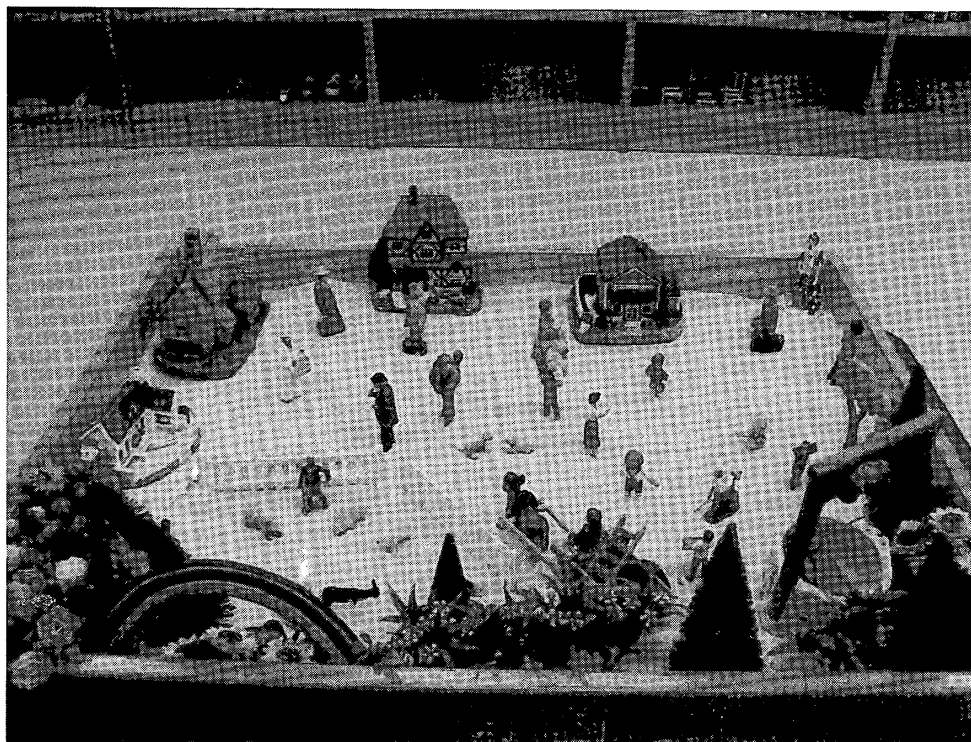
<家では、一緒に食べるとき、箸が向くこともあるが、親をみていなくてテレビを見ているから気づかないことがある。家では怖い感じは最近はない。>(関心を別に向けてるときは平気

なんだね)<ううん。そうかなあ。わかんない。>

5回目；<もう少しで保育実習があるんだけど、先端恐怖症でだいじょうぶか心配です。最近はいふ減少しているのですが。>(そうですね。ボールペンや箸は注射針ではないのですから、だいじょうぶでしょう。これは痛くない、注射針じゃないって思ってみたらどうかな)

6回目；<アルバイト週4日。バイト中が一番楽しい。学校がイヤだ。実習も自信がなく不安。>(だいじょうぶだよ。これは注射じゃないからだいじょうぶ。箸はごはんを食べる時に遣う安全なもの、思い出すといいよ。学校はどうして嫌いかな)<面白くない。バイトのほうが面白い>

7回目；先端恐怖のことでしばらく箱庭の経過をみていたが、さりげなくコラージュをすすめる。はさみの先端が恐いということであるので、そのはさみをさりげなく使ってコラージュを仕上げる。はさみの先を本の下に隠していたが、気に入ったのを切り始めると違和感なくす



箱庭写真 2

すめている。(もうだいじょうぶ。ほらはさみで切り取りして作品できたじゃない。もうよくなっているから。実習のとき気になったら、もうだいじょうぶだと自信をもつんだって思っでらん)〈はい。〉

8回目；MDステレオとウォークマンを購入した。だからバイト代なくなった。10日に新しいバイト代が入る。6万いくかいかないくらい働いている。髪切りに行くの、ストレートパーマにする。(先生らしくして実習に行くんだ。貫禄がつくね。大人を感じになるかな。だいじょうぶだよ) うん。そんな気がする。

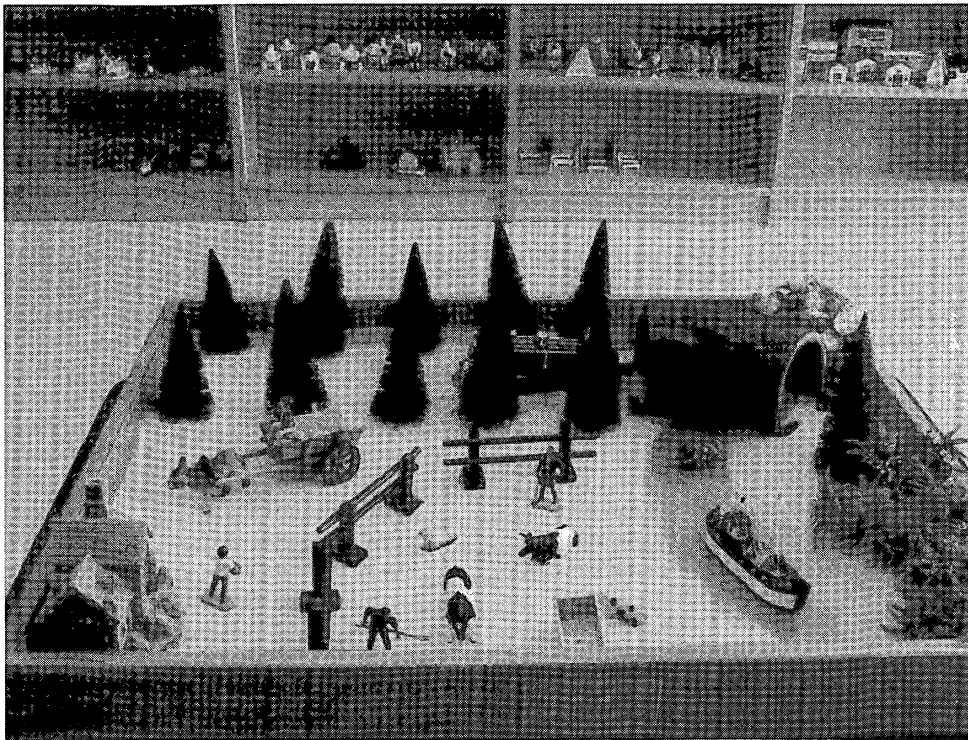
9回目；子どもはやんちゃで可愛かった。折り紙教えて、いっしょにしたり、四角いダンボールの作り方を描いて、あと日誌書いて眠る暇がなかった。子どもたちが箸を持って自分に刺すようにしたとき、驚いたけど、先生のことばを思い出して口でつぶやいたら、だいじょうぶだった。ひやりとはしたけど涙は出なかった。はさみで追いかけられたりしたときもあったけ

ど、危ないからだめって叱れた。箸もはさみの先も子ども相手じゃしかたがないって感じ。それに気にする暇がないほど、ずっと忙しかった。無事に終えて安心した。実習してやはり保育士になりたいって思った〉(よかったね。子どもはわからないから、無造作に先端をむけただろうけど、もう乗り越えれたね)〈でも、まだ心配ですから、まだ相談に通っていいですか。〉(ええ。いいですよ。自分からもういいと思えるまで) 実習を終えて精神的に脱皮した感じ。

第3期；自己統制期(安定期) (10回目から14回目)

10回目；〈自分は強い、タフなんだと思っている。みんなと一緒にいなくても平気だし、困っていなくても別に気にしない。バイトしてお金稼いで…弱いところはない。…何でだろう、わからない。〉(野性的な逞しさがあるよね。きょうは強いところをいっぱい気づいてみよう)

11回目；〈…テレビみてて、ひとが死んだり



箱庭写真 3

したとき、涙がポロリ、でもテレビ見てもそんなに悲しいとは感じない。友達と映画見に行って「陰陽師」平安京の時代…阿部の清明がオカマぽかったけど、カッコイイと思った。> (涙はやさしさだから、強いばかりでなく、繊細なやさしいところもあるんだね) <そうかなあ。自分じゃ気づかない。>

12回目；<学園祭、お姉さん先生をしたけど午前中だけ子供が来たけど暇だった。友達と教えるはずのおもちゃをいっぱい作っていた。やさしいところ、傷つきやすい部分を探してみる。気づくと楽になる。>

13回目；<8科目試験。来週の水曜日から9個試験。何となく授業で覚えている。年末不規則だったからやせちゃった。今のところはペン先に気にならない。今まで7人グループが中で分裂、新年になって、バラバラになろうといわれ、今は一人。7人の中で中の良い子は4人、私が入ると5人、バランス悪くなるといやだからと思う。>

たくましくなってはきたが、友達グループの分裂により、不安が出てくる。春休みになるのでテストが終われば気分も楽になるし、来年からゼミがあるという所属感、安堵感を生じさせてもいる。

14回目：年度末で試験も無事終えた。髪が切られていて、可愛らしくなっていた。女性らしく変身していた。先生にと好みの歌手の歌をMDに入れて、お菓子を持参してきていた。(ありがとう。大変身だね。とても女性らしくなった) と云うと、えへへと笑いながら喜んでいた。(もう春休みだけど、来年度になってまた先端が気になったらおいで) <はい。> その後は一度別な先生と話して終了する。半年後、ゼミのなかでリーダーとしてばりばりやっているとのこと(先生からの話)。

### 考察

この事例の面接経過から、変化過程を3期(①防衛期、②葛藤期、③自己統制期(安定期))に

分けてみた。先端に対する態度としてみると次のようになる。

- 1) 記録のボールペンが見えるだけで涙を流し、顔が蒼白になっていた。(防衛期)

1回目から3回目までの面接では、記録用のペン先が少し向けられるだけで、かなりの反応を示した。涙がにじんでいた。この時期は症状は以前と同じだったと思われる。

- 2) さりげなくリコーラジュを進め、はさみ使用が出来た。(葛藤期)

注射の話から少し洞察を加えたことで、半信半疑ではあったが、明らかな態度変化がみられている。保育園実習という課題があって、不安は増大するが、関心を別に向けながら症状を減らしていったのが、効を奏した。コラージュ作品を仕上げるという課題で、はさみの先が自分の方を向いてもだいじょうぶになっていた。

- 3) 話ながら時折、ボールペンを向けても話しが途切れることがなかった。(自己統制期)

実質的には保育実習を契機として、先端恐怖から脱皮できていた。実習体験は子供に対する責任感と親愛感のなかで、自分の先端恐怖をコントロールしていくという耐性をつくりあげた。これらの3期を箱庭記録からみると、次のようになる。

- 1期) テーマ：「アメリカ」

説明：昼間の日常生活を表現した。この作品はまだ未完成で、不足がある作品。

(1回目)

- 2期) テーマ：「都会と田舎」

説明：上は都会、下は田舎。都会の人はいそいで歩いていて、田舎の人はゆっくり歩いている。(8回目)

- 3期) テーマ：「牧場」

説明：昼間牧場で働いている。自分は、旅行中で汽車に乗っている。(12回目)

面接経過から、事例を解釈すると以下の4点

になる。

①事例は、非常に行動的な学生であり、元気であった。無理をして叱咤激励している感じがあったが、先端恐怖というわけのわからない恐怖感を忘れる意味でもアルバイトは、よかったのではないかと考察できる。少なくともリアルな学生生活で悩む暇を与えなかった。しかしそれは抑圧しただけであった。本質的な解決ではなかった。事例の幼少期からの理解として、先端にはかなりの混沌とした感情の抑圧が秘められていた。

②事例は体が弱くてよく高熱を出したが、多忙な母親の関心を引き、甘えられる機会でもあった。注射という痛みを伴うなかで甘えができた。マイナスへの報酬がある。注射を嫌がれば嫌がるほど、注射したあとに母はやさしくなり、事例にとっての母への甘えは痛みと嫌悪との引き換えであった。しかし幼少期では、かようなアンビバレントを統合する力はなく、メスや注射器に似た先端という形に恐怖感を残存させてきたと思われる。援助者としては、痛みを伴わない甘えや承認、関心を向け、心理的に抱擁する必要があった。つまり幼少期の母親の代わりである。年齢も自分の母親に近い援助者に、距離を置きながら甘えなおしの学習(何でも安心して話して受け入れてもらえる)をしていったと考察できる。

③事例は深く自分を言語化するよりも、行動化するのが好みであった。援助としては気づきとして言語化することは、難しいと思われ、深く内省や自分史を掘り下げをしないで、行動促進のなかでさりげなく洞察や気づきを暗示する形で行なわれた。かような事例の場合、体を動かすなかで変化していくことが多いものである。

④手術が何を意味していたか話さなかったが、かなりのトラウマがあった。トラウマを癒すこ

とが、援助者の課題でもあった。

これらの考察に加えて、事例には保育士になるという希望があり、また女性としてのアイデンティティの獲得の発達課題があった。特に痛みと甘えのアンビバレントな感情を共有してきた母親との関係を、痛みのない母親的なひととの関係によって、自分に自信を育てていった。保育実習はかなりのリスクも感じられたが、実習をやりこなすことができ、大きな自信につながった。その後先端恐怖による反応は大幅に軽減した。箱庭表現においては、ここでは解釈しないが、混沌した感情から、快適な感情への変化がみられる。男化してからだの感じる繊細

さを抑圧し、知性で頑張ってきた事例であるが、ピアノや創作などの頑張りと自信にマッチして、面接が進むにつれて女を出せるようになっていった。それは母子関係のやり残した関係つむぎを再学習し、心理的に成長したものと考察できる。

(注) 本事例は本人の了解のもとに報告発表しています。現在、コンタクトレンズを入れることもでき、先端恐怖はほとんどなくなったとの報告です。

平成14年9月25日